HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「聞き手と敬語の関係」の授業プラン
Author(s)	細川, 智央; 堀井, 奈々; 千廣, 峻史 他
Citation	教授学の探究, 26, 45-64
Issue Date	2009-02-16
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/35599
Type	departmental bulletin paper
File Information	hosokawa.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

「聞き手と敬語の関係」の授業プラン

細　川　智　央（3年），堀　井　奈　々（3年），
千　廣　峻　史（3年），鈴　木　純　一（4年）
（北海道大学教育学部教育方法学研究室）

目　　次

0．はじめに
1．「聞き手と敬語の関係」における教育内容構成
　1．1　目標の設定
　1．2　教育内容の構成要素
　　1．2．1　非相互的な関係か否かの判断――power の有無
　　1．2．2　相互的な関係における判断――solidarity の有無
　　1．2．3　power と solidarity における聞き手敬語の意味の区別
　　1．2．4　聞き手敬語不使用の条件
　　1．2．5　授業プランにおける変更点
　1．3　授業プランにおける教育内容の論理構造
2．高校生一日体験入学における授業実践と改訂
　2．1　「聞き手と敬語の関係」の授業プラン，および授業過程の評価
　2．2　感想文にみる授業評価
　2．3　授業プランの改訂

0．はじめに

北海道大学教育学部では，毎年6月に，高校生を対象とした一日体験入学が実施されている。この体験入学の場で，教育方法学ゼミは，ゼミに所属する3，4年生が作成した授業を実践している。[1] この取り組みの目的は，授業を通して，高校生たちに教育方法学研究グループが行っている研究の一端を知ってもらうことである。したがって，ただ高校生に授業を受けてもらうのでなく，“楽しく分かりやすい授業づくり”という視点を意識しながら授業に参加するよう促している。

2008年6月21日に実施したのは，「です・ます」（以下，聞き手敬語とする）に関する授業であり，授業プランを「聞き手と敬語の関係」と名づけた。この授業は，語句の対応に特化した形式的な敬語の指導でなく，聞き手の属性によって聞き手敬語の使用・不使用を決定するということに重点が置かれている。この授業に使用された時間は60分であり，26人の高校生

1　武田圭右ほか（2007）「「比較表現の比較・検討」の授業と改訂プラン」『教授学の探究』24号，pp.93-114

（1～3年）が参加した。このときの授業者は千廣峻史である。

なお，一日体験入学での実践，生徒たちの感想を参考に，授業プランを改訂した。その授業プラン（「めざせ!!　ですますたー」）を2008年10月21日，倶知安農業高校の1年生を対象に，授業研究として実施した。授業に参加した生徒人数は23名であり，授業者は一日体験入学のときと同じく千廣峻史である。また，倶知安農業高校の授業は50分で1時限分であり，今回使用したのは2時限分であった。

本稿では，聞き手敬語に関する授業プラン「聞き手と敬語の関係」における教育内容構成を提示する。また，授業プランによる授業過程の検討，およびそれをふまえた授業プランの部分的な改訂によって作成された「めざせ!!　ですますたー」について考察する。

1．「聞き手と敬語の関係」における教育内容構成

1．1　目標の設定

本研究におけるねらいは，聞き手敬語を取り上げ，聞き手敬語使用・不使用の選択要因，ならびに敬語の内包する意味を生徒たちが理解できる授業プランを作成することである。

中学校国語科の教科書[2]では，敬語の扱いはわずか4ページである。そこでは具体的な場面を3つ（友人同士で敬語を使い不自然さを表す場面，先生に対して尊敬語を使わず咎められる場面，伯父に対して謙譲語を使わず咎められる場面）あげている。そして丁寧語・尊敬語・謙譲語・美化語の説明がそれぞれ2，3行ずつあり，例えば，「言う」の尊敬語は「おっしゃる」であるというように，各々の語句の例が数個ずつ載せられている。はじめに「敬語というとすぐに，目上の人に向かって使う堅苦しい言葉だと思われがちですが，はたしてそうでしょうか。敬語の使われ方を調べ，そのはたらきや役割について考えてみましょう。」[3]と導入されているものの，目上の人以外に敬語を使う例には触れられていない。これでは，教科書において敬語が十分に取り扱われているとは言いがたい。また，生徒たちが本当に敬語のはたらきや役割について理解できるか，「言う」と「おっしゃる」のような語句の対応を形式的に学ぶだけで終始してしまわないか疑問が残る。

特に文末表現における「です・ます」は言語形式が単純であり，容易に使用することが可能だと思われがちである。それゆえ指導の比重は，尊敬語や謙譲語に比べて小さい。実際，中学校国語科の教科書では，「改まった場面や相手に対して敬意をはらわなければならないような場面で使うていねいな言葉を，丁寧語といいます」とあり，その例として「文末の『です』『ます』」「特に丁寧に言う場合の『でございます』」「講演や演説での『であります』」と表記されているに留まっている。[4]しかし，使用が容易だからこそ，「使うべき場面で使わないのは，尊敬語や謙譲語を使わないよりもはるかに罪が重い」[5]と言われるように，不適切な使い方は人間関係にも大きく影響を与えかねない。

したがって，本授業プランは，聞き手敬語の使用・不使用に関する選択要因への問いかけを

2　『伝え合う言葉　中学国語3』(2006)，pp.196-199
3　『伝え合う言葉　中学国語3』(2006)，p.196
4　『伝え合う言葉　中学国語3』(2006)，p.197
5　菊地（1997)，p.360

中心として，教育内容・教材を構成した。なお，本授業プランは藤原（2002）の理論に依拠しつつ，日本語学習者向けであったものに変更を加えることで作成された。

１．２　教育内容の構成要素

本授業プランは藤原（2002）に依拠している。藤原は，聞き手敬語の使い方が不自然な日本語学習者の多さを，学習者が「聞き手」[6]との関係を的確に判断できていないからだと指摘する。その原因として，「従来の指導では，上下，親疎，ウチソトなど社会的要因を羅列することに留まり，各々の関係を明確にしていなかった」[7]ことがあげられる。

また，藤原は３冊の日本語教育の教科書を参照し，それらで扱われている文末表現の問題について指摘する。すなわち，それらの文末表現の扱いは，いずれも，聞き手敬語を使用する相手，使用しない相手に対する条件を個別に列挙することに留まり，各々の関係，優先順位については触れられていない。そのため「目上だけれど，親しい人」「公的場面で，親しい人」など，複数の要因が絡むと判断が難しくなるという問題を抱えていた。そのうえ，条件には，①聞き手の属性（年上の人，初めてあった人，上司，……），②話し手の属性（自分が新入社員の場合，店員などが客に対して，……），③場面（会議などの公的な場，……）という３つの要因が混在しており，焦点が明確にされていないことも学習者の混乱を招く一因だと考えられる。

したがって藤原は，聞き手敬語の使用条件を考えるにあたって，「学習者が即座に文末表現を決定できるように，簡潔で体系化された選択条件が望まし」く，また，「選択要因を出来るだけ簡略化し，焦点を明確にすることも必要である」とした。[8]そこで，聞き手敬語使用・不使用の選択要因を，場面や話し手の変化でなく，すべて聞き手の属性のみに限定するものとして考えた。

話し手と聞き手の関係を分類するのに用いたのが，一方が他方の行動をコントロールするpower（権力）と相互に存在するsolidarity（連帯感）[9]という社会的概念である。話し手と聞き手の関係は，一方のみがpowerを持つ「非相互的な関係」と，両者の間にpowerが存在しない「相互的な関係」とに大別される。

話し手は，聞き手の属性にpower，solidarityの有無を見る。そして，その存在の有無を認識・判断することによって，話し手は聞き手敬語の使用・不使用を決定する。その際，powerとsolidarityにおける聞き手敬語の使用では意味が異なる。

また，以上のように大別しながらも，現代社会における発話は普通体より丁寧体で話すことが多いとし，藤原の研究では聞き手敬語を使用することを前提とする。したがって，聞き手敬語の不使用は特別な条件のみとして，限定的に枠組みを設けた。これは，従来のように対立関係にない不規則な選択条件を個別に獲得するという，学習者の負担を軽減するよう考慮したた

6　藤原（2000）は，日本語教育において「聞き手」の分類がなされず，配慮すべき「聞き手」が明示されてこなかったことも，不適切な聞き手敬語選択の一因であると述べている。

7　藤原（2002），p.49

8　藤原（2002），p.50

9　A. Gilman and R.Brown.1960.“The Pronouns of Power and Solidarity.”Style in Language. Edited by T.A. Sebeok. The MIT Press. 筆者は原著未読。本稿の引用は，藤原（2002），p.50による。

めである。

これらの点を踏まえると，藤原（2002）に基づく教育内容の構成要素は次のようにいえる。

①非相互的な関係か否かの判断――power の有無

②相互的な関係における判断――solidarity の有無

③power と solidarity における聞き手敬語の意味の区別

④聞き手敬語不使用の条件

１．２．１　非相互的な関係か否かの判断――power の有無

「『非相互的な関係』で聞き手に power がある場合には，『聞き手敬語』の使用が必須である」[10] と藤原は主張する。使用しなければ，聞き手に「自分は話し手と同等な程度にしかみなされていない」と判断され，人間関係に支障をきたしかねない。したがって，power の存在の有無が聞き手敬語の使用・不使用を決定する第一条件となる。

なお，蒲谷（1998）は敬語表現の選択について，「人間関係」は多くの場合，「社会的」あるいは「文化的」な「立場・役割」をどう認識し，位置づけるか，一般的な認識を考慮しながら「敬語表現」を考えていく必要があるとしている。[11]

つまり，話し手は，聞き手との関係を社会的・文化的，立場・役割に基づいて第一に power の有無を認識し，聞き手敬語の使用・不使用を決定するのである。

１．２．２　相互的な関係における判断――solidarity の有無

「話し手と聞き手の間に power が存在しない『相互的な関係』の場合，両者は対等な関係にある」といえ，「この場合，solidarity の有無により『聞き手敬語』の使用・不使用が決定される」[12] と藤原は述べている。つまり，solidarity が存在する場合は聞き手敬語を使用せず，solidarity が存在しない場合は使用する。もし solidarity の存在があるにも関わらず，話し手が聞き手敬語を使用すると，聞き手は他人行儀でよそよそしいと感じてしまう。反対に solidarity がない場合の聞き手敬語の不使用は，聞き手に馴れ馴れしい印象を与えてしまう。

したがって話し手は，第一に power の有無を判断し，power が存在しない場合には，solidarity の有無を認識し，聞き手敬語の使用・不使用を決定する。

１．２．３　power と solidarity における聞き手敬語の意味の区別

以上の分類からも明らかなように，「日本語では基本的に非相互的な関係において solidarity は関与しない」。[13] 日本語で親疎より上下関係が優先すると言われるのはこのことに起因する。したがって，非相互的な関係と相互的な関係では聞き手敬語使用の意味が異なる。藤原は両者を区別しなければならないとし，両関係における聞き手敬語の意味を次のようにまとめた。

10　藤原（2002），p.51

11　蒲谷　宏・川口　義一・坂本恵（1998）『敬語表現』，大修館書店。筆者は原著未読。本稿の引用は，藤原（2002），p.53 による。

12　藤原（2002），p.51

13　藤原（2002），p.51

表１．「聞き手敬語」選択条件[14]

	聞き手敬語使用	聞き手敬語不使用
A	「聞き手が power を持つ」とみなす	「聞き手が power を持つ」とみなさない
B	「聞き手との間に solidarity が存在する」とみなさない	「聞き手との間に solidarity が存在する」とみなす

A：非相互的な関係　　B：相互的な関係

これらを踏まえると，聞き手敬語の選択過程は下図のようになる。

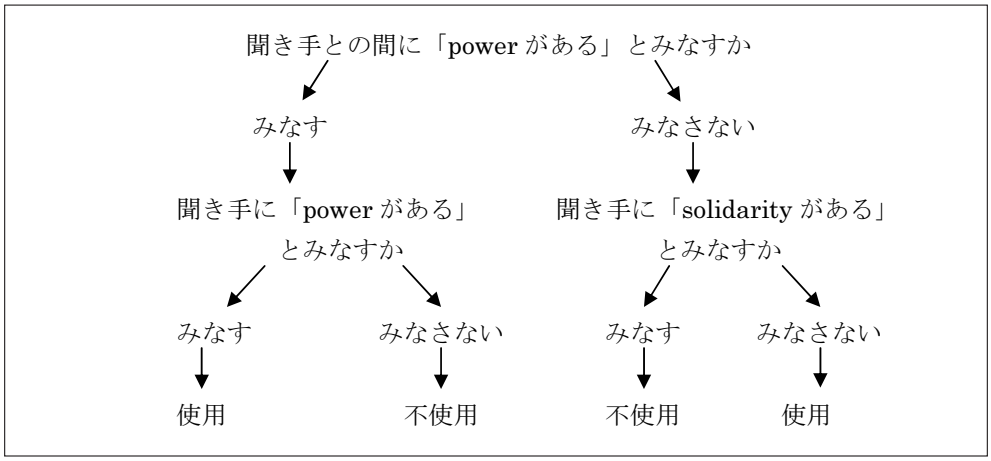


図１．「聞き手敬語」の選択過程[15]

１．２．４　聞き手敬語不使用の条件

以上のように聞き手敬語使用・不使用の選択条件を体系化した藤原であるが，現代社会への適応のしやすさを考慮し，発話の基本は聞き手敬語使用であることを前提にすると述べている。これは先にも述べたとおり，学習者の負担を軽減するためである。したがって，聞き手敬語が不使用である条件として，以下のとおりに分類，限定した。[16]

⑴　非相互的な関係
　①同一タテ社会において聞き手が明らかに power を有しない場合
　②品物やサービスを提供する業者に対して注文するような場合
⑵　相互的な関係
　③親しい間柄
　④家族（親子，夫婦，兄弟姉妹）

14　藤原（2002），p.51
15　藤原（2002），p.51
16　藤原（2002），p.51

以下，具体例を藤原（2002）から引用する。[17]

①同一タテ社会において明らかに聞き手が power を有しない場合
先輩が後輩に，社長が社員に，アルバイト先の店長が店員に向けて「聞き手敬語」不使用で発話する例である。もし，上級生が見ず知らずの別のクラブの下級生に，あるいは会社の社長が他社の社員に「聞き手敬語」を使用しなければ，聞き手に横柄，傲慢といった印象を与え，丁寧さに欠けた発話になる。このように power は，絶対的なものではなく，限定された範囲でのみ効力を有す。同一タテ社会と限定したのはこのためである。
②品物やサービスを提供する業者に対して注文するような場合
客が注文を聞かれ，「サンドイッチ」「ラーメン一つ」と答える例である。それに対し，客が何かを尋ねる時に「いくら？」「ワインある？」「トイレどこ？」と言えば丁寧さに欠け，聞き手に不快感を与えるかもしれない。この非相互的な関係は一時的なもので，一歩店を出ると成立しない。このように客と店員の関係で，不使用が認められるのはごく限定された状況だけと言える。
③親しい間柄
友達，同じクラブやゼミの同級生などが考えられる。あくまでも原則は power が存在せず solidarity が存在する関係である。
④家族
本稿［藤原（2002）――註は引用者による］では，日本の家族に非相互的関係が存在するか否かには触れず，言語使用において非相互的関係が存在しないという立場から家族を⑵に分類した。

１．２．５　授業プランにおける変更点

以上が藤原（2002）の理論における教育内容の構成要素である。しかし，藤原（2002）の理論は日本語学習者向けのものである。したがって本授業プランでは，日本語を母語とする生徒を対象にするため，以下の点に変更を加えた。

①power と solidarity の訳語
②power と solidarity の関連性
③聞き手敬語不使用の条件
④敬語における「距離」という概念の導入

①は，power と solidarity の訳語についてである。藤原（2002）では，power を「権力」，solidarity を「連帯感」としている。しかし，「権力」等の表現では生徒たちに馴染みがなく，生徒たちがイメージをつかみにくいと考えた。したがって，本授業プランでは東（1997）の訳を参照し，power を「力関係」，solidarity を「仲間意識」という表現に変更した。
②は，power と solidarity の関連性についてである。藤原は「『非相互的な関係』で聞き手

17　藤原（2002），p.52

に power がある場合には，『聞き手敬語』の使用が必須である」[18] と主張し，power の優位性を説いた。しかし，聞き手の属性は固定的でなく，変動的・複合的であることが多い。例えば，店員と客の関係は一歩店を出ると成立しなくなり，変動的な関係だといえる。また，「年上の義弟，幼馴染である先輩」[19] などは様々な尺度の power と solidarity が絡んでおり，複合的な関係に該当する。

したがって本授業プランでは，無条件で power が優位に立つのではなく，話し手が聞き手をどう認識するか，その認識に基づいて聞き手敬語の使用・不使用を選択できるかに重点を置いた。つまり，もし聞き手が「年上の義弟」の場合，話し手は聞き手を「年上」（power がある）とみなして聞き手敬語を使用するとは限らない。聞き手を「義弟（家族の一員）」（solidarity がある）とみなし，聞き手敬語不使用を選択することも可能なのである。

③は，聞き手敬語不使用の条件についてである。藤原（2002）では日本語学習者の負担を減らすために設定された条件であるが，本授業プランでは日本語を母語とする生徒が対象のため，特に留意しなかった。

④は，敬語における「距離」という概念の導入についてである。藤原（2002）では触れられていないが，本授業プランでは，敬語の役割は話し手と聞き手の間に「距離」を置く・保つことだという概念を取り入れた。この「距離」とは社会的距離，心的距離のことである。また，この概念を表現するため，藤原（2002）に示された図 1 ではなく，隔たりや高さによって「距離」を示す図を使用した。

1．3　授業プランにおける教育内容の論理構造

本授業プランにおける教育内容の論理構造は，以下の通りである。

①　power という概念の発見

第一に，聞き手敬語を使用する際には power という概念が関わっていることを明らかにする。そのために一方が丁寧体で他方が普通体という非相互的な関係の具体例を生徒たちにあげてもらい，共通項としての power を示す。solidarity の発見より power の発見を先に明らかにするのは，power の方が聞き手敬語使用の必要性が高く，また，使用場面が多いと予想されるためである。

②　solidarity という概念の発見

聞き手敬語を使用する要因として，power だけでなく，solidarity という概念が関わっていることを示す。power のときと同様，両者が丁寧体である相互的な関係，また，両者が普通体である相互的な関係の具体例を生徒たちにあげてもらう。両者の差異によって，よりはっきりと solidarity の概念が浮き彫りになるだろう。

③　「距離」という概念の導入

本授業プランは全体として，円滑なコミュニケーションをとるために聞き手敬語の使用・不使用を選択することを前提としている。したがって，話し手の認識と聞き手の認識にずれのない場合が多く想定される。しかし，実際の場面では話し手の認識と聞き手の認識にずれ

18　藤原（2002），p51

19　本授業プラン「聞き手と敬語の関係」の問題 3 で具体化した。

が生じる可能性がある。（例えば，喧嘩した２人のうち，１人が仲直りを試みようと普通体で話しかけるが，相手がいまだに怒っており，あえて丁寧体を使う場面，一方が親密になりたいと思い普通体で話しかけるが，他方はそれを拒み丁寧体で答える場面などが事前に想定された。）

生徒たちがそのような例外をあげた場合，敬語の役割としての「距離」で説明を試みる。そうすることで，power と solidarity の共通点（それが「距離」である）もより把握しやすくなるだろう。生徒たちから例示されなかった場合，教師の方から例を出してもいい。

④　power と solidarity の優位性

聞き手敬語を使用する際には power と solidarity という概念が関わっているという原則を生徒たちにつかんでもらった次に，より複合的な状況を示す。そして，聞き手が同一人物だからといって，聞き手敬語の使用・不使用の決定が固定されるわけではないということを明らかにしなければならない。話し手の認識，聞き手の属性は変動するものである。問題は，使用・不使用を選択する際に，聞き手に power の有無，solidarity の有無を認識しているかどうか，その認識に基づいて選択できているかどうかである。

２．高校生一日体験入学における授業実践と改訂

２．１　「聞き手と敬語の関係」の授業プラン，および授業過程の評価

以下，ここでは一日体験入学の際に行われた，「聞き手と敬語の関係」の授業の概要について述べる。なお，この一日体験入学での授業は，教育基礎論系Ｊコース「ゼミナール体験『授業を創る』」というゼミナール体験の一環として行われたものである。

・授業形式

一日体験学習に参加した高校生 26 名を，Ａ班，Ｂ班，Ｃ班，Ｄ班，Ｅ班の５つのグループに分け，問題を解いていく過程で議論を行い，解答を発表するという形で授業を行った。また，問題は授業の進行にあわせてプリントを問題１から１枚ずつ順に配布していくものであった。

・授業プラン

問題１

本問題では導入として，敬意の対象によって使用する敬語の種類が，話題の人物に対して使用される「話題敬語」，聞き手に対して使用する「聞き手敬語」の２種類あることを認識する。この２種類の敬語の中でも，聞き手に対して敬意をはらう聞き手敬語を意識することが目的である。

千夏は、入社して３年目のOLである。
千夏は新入社員・部長と一緒に、社長と同僚の出勤を待っていた。

【問題１】

千夏はやって来た人物に気づき、［ A ］に言った。

(1)「［ B ］がいらっしゃいました。」

(2)「［ B ］がいらっしゃった。」

(3)「［ B ］がきました。」

(4)「［ B ］がきた。」

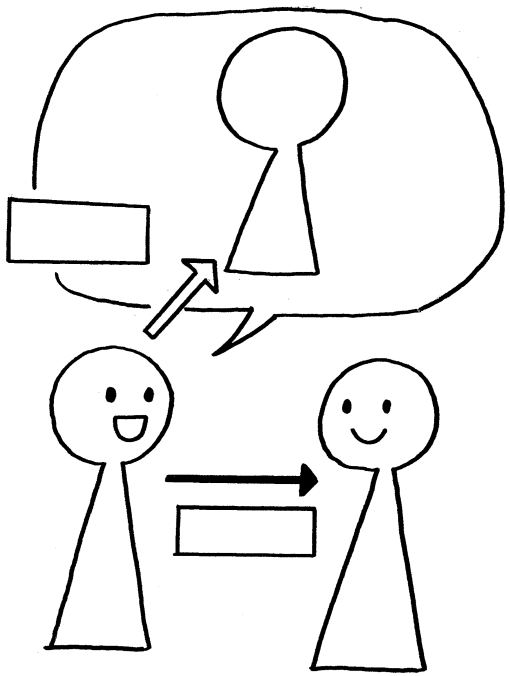
上の（1）～（4）の場合について、千夏が話しかけた相手［ A ］、
やって来た人物［ B ］を、それぞれ適切になるよう選択しなさい。

	A	B
(1) の場合	（ 新入社員 ・ 部長 ）	（ 同僚 ・ 社長 ）
(2) の場合	（ 新入社員 ・ 部長 ）	（ 同僚 ・ 社長 ）
(3) の場合	（ 新入社員 ・ 部長 ）	（ 同僚 ・ 社長 ）
(4) の場合	（ 新入社員 ・ 部長 ）	（ 同僚 ・ 社長 ）

【解説】

答え･･･ (1) A ：「部長」 、 B ：「社長」
(2) A ：「新入社員」 、 B ：「社長」
(3) A ：「部長」 、 B ：「同僚」
(4) A ：「新入社員」 、 B ：「同僚」

Q.「いらっしゃる」と「きます」のちがい
⇒**敬意の対象**によって、「敬語」を大きく２つに分類する。



〔授業の進め方〕

「いらっしゃいました」，「いらっしゃった」，「きました」，「きた」という４つの言葉を使い，それぞれ千夏が話しかけた人物とやってきた人物を選択肢から選ぶ問題であった。また，解答欄は用意していないが，それぞれの解答理由をグループ内で相談しあい，グループとして１つの答えを導きだすように授業を展開した。

グループ内での議論については，高校生が初対面同士であることから，発言をしにくそうな生徒が見られたものの，時間と共に活発に議論を展開していた。

以下は授業の記録である。改訂する上で重要な発問，及び解答となった部分に関して言及することとする。なお，記述の上ではＴを授業者，Ｓを生徒する。

〔授業記録〕

Ｔ：それじゃあ，それぞれのグループで話し合って出した答えを聞いていこうと思います。まず，⑴はどんな答えになったでしょうか，理由も聞かせてください。森さん。Ａ班は⑴の答えはどうなったか，教えてください。

Ｓ：Ａが部長で，Ｂが社長。

Ｔ：じゃあ，森さん，Ａ班はどんな理由でこの答えにしましたか。

Ｓ：「いらっしゃる」っていうのは，自分より上の人に使う言葉で，「ました」という言葉も，聞いてる人が自分より偉い場合に使う言葉だから。

Ｔ：なるほどね。じゃあ，次は⑵について聞いてみましょう。これはどうなったでしょうか。Ｂ班の人にグループの意見を聞いてみましょう。安藤君，どうでしょう。

Ｓ：Ａが新入社員で，Ｂが社長。

Ｔ：これはどういう理由で？

Ｓ：社長は目上の人で「いらっしゃる」を使って，新入社員には「ます」を使う必要がないから。

Ｔ：どうもありがとう。では，今度は⑶に行こうと思います。阿部さん，Ｃ班ではどんな答えが出ましたか。

Ｓ：Ａが部長で，Ｂが同僚。

Ｔ：これはどうしてこういう答えになりましたか？

Ｓ：部長に対しては「ます」って敬語を使っているから。

Ｔ：うん，なるほど。では最後，⑷の答えをＤ班に聞いてみようと思います。小林君，ＡとＢにはそれぞれ何が入りましたか？

Ｓ：Ａが新入社員で，Ｂが同僚。

Ｔ：理由を教えてもらえるかな？

Ｓ：話しかけてる人も来た人も，自分と同じか下の立場だと思ったから。

Ｔ：はい，みんな，どうもありがとうございます。それじゃあ，解説を配るので，みんなの出してもらった理由も見ながら考えていきましょう。

解答の傾向としては，全てのグループが正解を導きだし，その理由についても漠然とではあるが，「敬意の対象によって変化する」ことをとらえているように思われた。これをより明確にするために，解説の図による視覚的理解を促した。この解説により，聞き手に向けて敬意を

はらう時に使用する敬語が聞き手敬語であることを認識させ，以後の問題で聞き手敬語についての問題を扱うことを強調した。

問題 2

本問題の目的は，聞き手敬語の使用・不使用の選択要因が「力関係（power）」と「仲間意識（solidarity）」があることを，生徒が認識することである。

〔授業の進め方〕

2 人が会話している文を見て，その 2 人の関係がどのようなものなのか，具体例をあげる問題であった。

本問題も，グループでの議論をもとに解答を導きだしてもらった。しかし，問題の性質上，それぞれの生徒の認識が異なるために様々な具体例があげられ，同じグループ内でも意見がまとまりきらなかったように見受けられた。

〔授業記録〕

T：それじゃあ，それぞれのグループではどんな例が出たかを聞いていこうと思います。まず，⑴はＡとＢ，2 人のどんな関係が浮かび上がってきましたか。ではＥ班の山口さん，どうでしょうか。
S：Ａが先輩でＢが後輩。
T：なるほど，他にはどんな答えが出たかな？
S：（Ｄ班の生徒が）先生と生徒。上司と部下。
T：他にはないかな？
S：（Ｂ班の生徒が）ＡとＢは知り合いで，ＢはＡに対して怒っている。
T：はい，どうもありがとう。それでは⑵も聞いてみたいと思います。これはＣ班に聞いてみましょう。佐藤さん，どうでしたか？
S：友達じゃない，ただの知り合い同士。あと，同僚二人の会話。
T：うん。他に答えが出た班，ありますか？
S：（Ｂ班の生徒が）店員とお客さん。
T：はい，どうもありがとう。では，今度の⑶はＡ班の大木君，⑶はどんな答えが出ましたか？
S：家族，友達同士。
T：はい，みんな，どうもありがとうございます。それじゃあ，この問題で何をわかって欲しかったのか，解説を見た上でお答えしようと思うので，ちょっと見てみてください。

解説は，⑴では二人の間に「力関係」が発生するためにＢが聞き手敬語を使用したものであるとした。⑵では「力関係」ではなく，「仲間意識」が双方にないために，共に聞き手敬語を使用するものであるとし，⑶では⑵とは逆に「仲間意識」があるため，聞き手敬語を使用しないものであるとした。これらの「話し手の判断した関係性」と「聞き手の判断した関係性」が合致することで，円滑なコミュニケーションをはかることができるとした。

生徒の解答の中でも，特に興味深いのは⑴におけるＢ班の解答である。「ＢはＡに対して怒っている」という旨の発言があった。聞き手との間の「力関係」ではなく「仲間意識」に着目し

【問題 2】

会話をしている 2 人は、どのような関係だと考えられるか。
いくつか具体例を挙げなさい。

(1) A：「昨日パーティーに行った？」
B：「いいえ、行きませんでした」

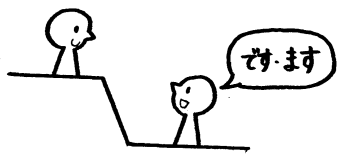
(2) C：「昨日パーティーに行きました？」
D：「いいえ、行きませんでした」

(3) E：「昨日パーティーに行った？」
F：「いいや、行かなかった」

【解説】

(1) A：「昨日パーティーに行った？」　B：「いいえ、行きませんでした」

年齢や立場、役職など、聞き手との間に**力関係**がある。



例：先生と生徒
上司と部下

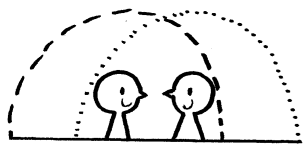
(2) C：「昨日パーティーに行きました？」　D：「いいえ、行きませんでした」

連帯感、共感、親近感など、聞き手との間に**仲間意識**がない。

例：初対面の人

(3) E：「昨日パーティーに行った？」　F：「いいや、行かなかった」

連帯感、共感、親近感など、聞き手との間に**仲間意識**がある。



例：友人、家族

・敬語における敬意の役割は、相手との隔たり、距離感覚を置く（保つ）こと
・円滑なコミュニケーションをはかるには、「自分の判断した関係性」と「相手の判断した関係性」が合致することが大切

たのである。これは，話し手の認識と聞き手の認識にずれが生じた際に起こることの一例である。また，先ほどのＢ班の意見についても言及し，聞き手との間にある「距離」によって，聞き手敬語の使用・不使用の選択を行うことを，図との対応から理解してもらった。

問題３

本問題では，「力関係」と「仲間意識」の優位性を問い，聞き手敬語の使用・不使用を選択する際，聞き手との間に，「力関係」の有無および「仲間意識」の有無を認識し，それに基づいて選択できることが目的である。

〔授業の進め方〕

聞き手敬語の使用・不使用の決定を，⑴～⑷に示された人物に対して行い，その理由を考察する問題であった。選択肢は①（聞き手敬語を使用しない）と②（聞き手敬語を使用する）の二つを用意し，自らの意見に合う選択肢に挙手をしてもらい，その答えを以下のように集計した。

表２．問題３における生徒の解答，及びその理由

	①を選択した人数	①の主な選択理由	②を選択した人数	②の主な選択理由
⑴　年上の義弟	5 人	・年上でも家族。	21 人	・あまり接点を感じない。 ・年上である。
⑵　友人の友人	9 人	・友人の友人は，自分にとっても友人。	17 人	・初対面にはとりあえず敬語を使う。
⑶　年下の先輩	2 人	・先輩だろうと年下。	24 人	・年下だろうと先輩。
⑷　幼馴染である先輩	22 人	・仲がよければ平気。	4 人	・周りの目が気になる。

この問題では，生徒が解答する際，選択肢が２つであることに戸惑った様子が見受けられた。問題で示された「年上の義弟」，「年下の先輩」といった人物関係が，高校生には理解しにくかったことも一因であるが，最も戸惑う生徒の多かった⑷での授業過程に，その理由を見ることができる。

〔授業記録〕

Ｔ：じゃあ，⑷で②を選んだ人に理由を聞いてみます。じゃあ，Ｅ班の人に聞いてみようかな。
　　浅野君，②を選んだ理由は?
Ｓ：教室で他の先輩が見ていたら，生意気に見られると思います。
（教室で笑いが起こる）
Ｔ：そうだね。確かに。他に②を選んだ人の中で，違った理由だっていう人，いるかな？
Ｓ：（Ｂ班の生徒が）②というわけじゃなくて，中間意見なんですけど･･･。

【問題 3】

① 「この後、何か予定がある？」
② 「この後、何か予定がありますか？」

下記の人物に対して予定があるか尋ねるとき、あなたは①と②のどちらを用いるか。
理由もあわせて考えなさい。

(1) … 年上の義弟 （ ① ・ ② ）
理由

(2) … 友人の友人 （ ① ・ ② ）
理由

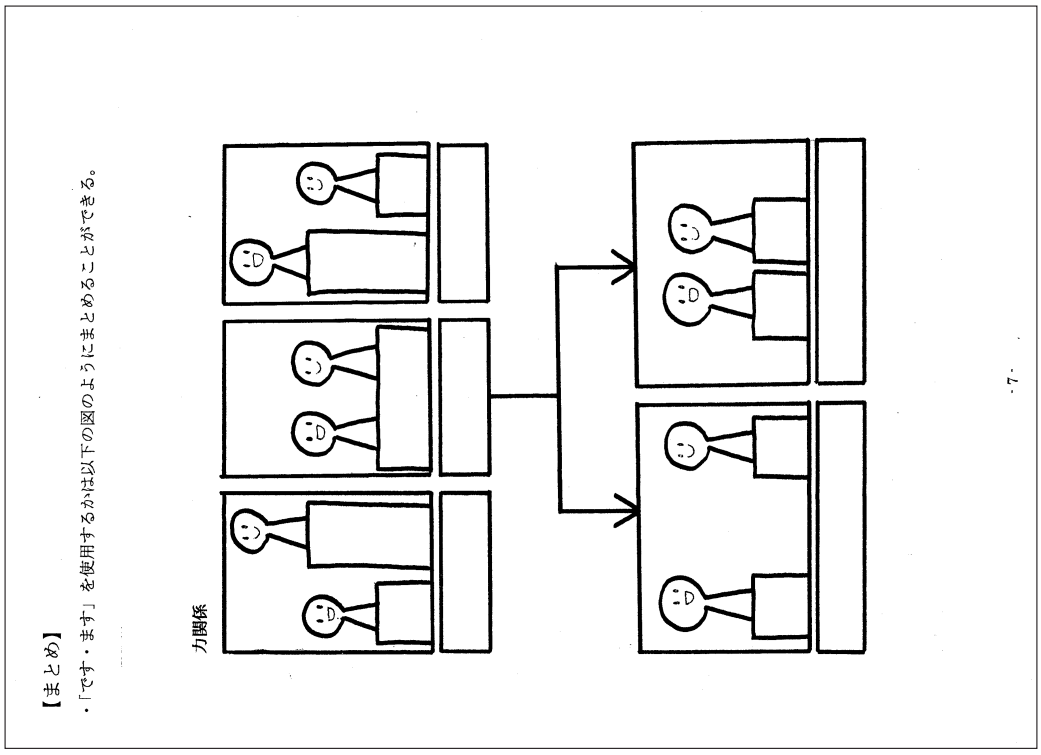
(3) … 年下の先輩 （ ① ・ ② ）
理由

(4) … 幼馴染である先輩 （ ① ・ ② ）
理由

【解説】

「使用する・使用しないのどちらを選択するか」が重要なのではなく、
「理由」と「選択肢」が合致していることが重要。

強い力が相手でなく自分にある	なので	「です・ます」を使用しない
力関係は関与させずに仲間意識がある		
強い力が相手にある	なので	「です・ます」を使用する
力関係は関与させずに仲間意識があまりない		



T：中間意見？　どんな理由になったのかな？
S：２人きりでいるときには敬語を使わなくてもいいと思うけど，他の人が見ていたらやっぱり敬語を使ってしまうと思います。
T：なるほど。使うか使わないかは，周りの状況で変わるって意見だね。

このように，第三の選択肢が要求されたことからも，二択問題としての出題に対して，明確な答えを提示することが難しかったのではないかと思われる。

これらの意見は一見，聞き手との会話においては，聞き手との関係のみを考慮して聞き手敬語の使用・不使用を決定するという藤原（2002）の理論とは異なるように見える。しかし，これは場面の変化ではなく，聞き手の属性が変化したことにより，聞き手敬語の使用・不使用を決定したと見るべきである。生徒は聞き手の属性変化を教材，および授業からは理解できなかったようである。

解説では，聞き手の属性をどのように判断し，その判断理由と選択肢が合致していることにより，円滑なコミュニケーションがはかられるものと強調した。

また，最後のまとめでは，「力関係」と「仲間意識」が並立している関係の場合，power が優先されるとする藤原（2002）の説をフローチャートで説明した。

２．２　感想文による授業評価

授業の終了後，生徒に自由記述方式で感想文を書いてもらった。なお，全て無記名であり，グループ名のみがわかるようになっている。感想文の集計の結果，以下のようにまとめること

ができる。2．1でも述べた通り，本授業はゼミナール体験という名目で行われているため，表3における肯定的評価とは現状のプランで内容を理解することが可能であると生徒が感じたもの，否定的評価は今後に向けての改訂が必要であると生徒が感じたものである。

表3．感想文に見る生徒の評価

	肯定的評価	否定的評価
全体的評価	24人	0人
問題1（聞き手敬語への意識）	2人	1人
問題2（「力関係」と「仲間意識」の認識・理解）	4人	1人
問題3（「力関係」と「仲間意識」の優先度）	1人	12人

授業全体における肯定的評価の中で，授業プランの構成や教材に関して肯定的なものをいくつかあげる。できる限り原文をそのまま転載しているが，明らかな誤字脱字は修正した。なお，括弧内の番号は回収した感想文につけた通し番号である。

「グループで話して，意見をまとめて発表する，参加する授業を体験できて楽しかったです。こういう授業が学校でもあればいいなと思います。」（3番）
「今日の授業は最初簡単だと思ったけれど，だんだん授業の内容がつながっていて，わかりやすくまとまっていておもしろかった。」（6番）
「今まで何気なく使っていた敬語の事を，たくさん知ることが出来て良かったです。図や黒板の説明が分かりやすくて，これからは相手や自分の立場をもっと考えて話そうと思いました。」（17番）
「最初は基礎基本（当たり前のようなこと）からはじめて，最終的に問題のレベルを上げるというやり方はとても段階的で，わかりやすかったです。」（25番）

このような意見から，生徒は系統的に学習することの意義，受け身ではない能動的学習の楽しさを実感することができたと思われる。そして何よりも，聞き手敬語という概念を認識し，以後の生活における意識付けがなされたことは大きな成果である。

次に，授業時には問題3として取り扱った，「力関係」と「仲間意識」の優先度における否定的評価をあげておく。また，ここでの括弧は筆者による補足である。

「（問題3の）選択肢が①と②だけなのは少し選びにくかったです。③『相手と自分が親しいとき』などあると良いと思います。」（17番）
「（問題3の）選択肢は①②以外に③も付け加えてもらった方が良かったです。私以外にも，①②どちらにすれば良いか，まよった人はいたので，考えてほしいです。」（18番）
「普段，敬語の使い分けは上下関係とか仲間意識とかだけじゃなく，その場の状況や雰囲気でも使い分けをしているので，『使う』，『使わない』の2択で選ぶのは，少し難しかったで

す。」（19 番）
「授業で使ったプリントでは，問題の中で，時と場合によって答えが変わってくるものがあったので，もう少し選択肢を増やしたりといった工夫をしていただけたらより良くなると思いました。」（20 番）
「問 3 で，『真ん中』という答えが出たように，別な答えも出しやすいような工夫が必要ではないかと思いました。」（21 番）

生徒にはおおむね肯定的に受け入れられた。その一方で，問題 3 については，聞き手の属性が変化することにより，聞き手敬語の使用・不使用の決定も変化するという認識を持つには至らなかった。これは，改訂にむけての大きな課題の 1 つである。

2．3　授業プランの改訂

高校生一日体験入学の授業評価をうけて，本授業プランを改訂した。高校生が出してくれた改訂に向けての意見は，問題 3 の「年上である幼馴染」との対話では「周囲に他の先輩がいるか」など，時と場合に即して判断するので聞き手敬語の使用・不使用を即答できない，という一点に集中していた。したがって，この点をより理解しやすくすることが最大の課題である。

問題 1 については，聞き手敬語を取り扱うための導入となる問いであり，一日体験入学では易しいと評価した生徒もいた。問題内容は変更せず，言葉づかいを中心に変更を加えた。また解説は「聞き手敬語」「話題敬語」といった用語を排除して構成した。

問題 2 では，「パーティーに行く」という場面に馴染みがない，との高校生からの指摘を受けて「札幌駅に行く」という，より身近で具体的な場面に設定を変えたが，問題 1 と同様，内容に大きな変更はない。ただし，問題 2 の解説については高校生一日体験入学で使用した「距離」ということばを排除した。また，一日体験入学での討論中に高校生が「力関係」を「上下関係」と表現することが多く見受けられたため，これに合わせて「力関係」の表記をすべて「上下関係」に改めた。

問題 3 については，高校生から改訂すべきという意見が最も多く寄せられた箇所である。特に，⑷「幼馴染である先輩」に対しては，「その場の状況や雰囲気でも使い分けをしている」との発言があり，授業全体に大きな影響を与えていた。これは，藤原（2000）の「会話の参与者」[20] に関する概念を授業プラン作りの中で，混乱を避けるために，意図的に排除したことが原因である。

会話の参与者は「話し手」と「聞き手」に大きく分類できる。「話し手」は 1 つの意味しか持たないが，「聞き手」は複数の意味を持つ言葉である。藤原は Bell（1984）の Audience design と Clark（1996）の participants の概念を基にして，以下のように聞き手を分類している。

20　藤原（2000）pp.61-63

表４．会話参与者の分類[21]

Ⅰ　会話参与者　participants
　1　話し手　speaker
　2　聞き手　audience
　　⑴　認められた聞き手　ratified audience
　　　①　直接話しかけられた聞き手　addressee
　　　②　話しかけられていない聞き手　non-addressee
　　⑵　認められていない聞き手　non-ratified audience
　　　①　偶然聞いた人　overhearer
　　　②　盗み聞きした人　eavesdropper

このうち，聞き手敬語の使用・不使用を選択する要因となる聞き手の範囲は，⑴「認められた聞き手」であると藤原は述べている。一日体験入学で高校生が述べた「周囲に他の先輩がいるか」という場の問題は，②「話しかけられていない聞き手」の概念によって起こったのである。

そこで，問題３を改訂する際に「店員と来客した友人」「幼馴染である先輩と後輩」という上下関係・仲間意識がともにある２人の対話文を提示した。この対話文のなかで，店長を②「話しかけられていない聞き手」として設定し，「幼馴染である先輩と後輩」の問いでは対話文中に他の⑴「認められた聞き手」が存在しないことを示した。

最後に，本授業プランの聞き手敬語の使用・不使用の選択要因が理解できたかを確認することをねらいとして演習問題を作成した。図で表現した「聞き手」との「上下関係」と「仲間意識」を同じく生徒に図で表現させることで理解度をはかる問題である。

末尾に，改訂した問題３と演習問題を載せる。また，この改訂版授業プランは，2008 年 10 月 21 日に倶知安農業高校で「めざせ!!　ですますたー」として実践した。

＜参考文献＞
東　照二（1997）『社会言語学入門―生きた言葉のおもしろさにせまる』研究社出版
菊地　康人（1997）『敬語』講談社学術文庫
鈴木　睦（1997）「日本語教育における丁寧体世界と普通体世界」『視点と言語行動』くろしお出版
武田　圭右・佐藤　裕太・豊澤　淳子・水野　泰希・森蔭　祐・若山　薫里・伊藤　由香・奥山　友貴・林　大輔・結城　拓（2007）「「比較表現の比較・検討」の授業と改訂プラン」『教授学の探究』24 号
藤原　安佐（2000）「「聞き手」概念の整理と区別―「聞き手敬語」選択に関連させて―」『日本語教育』105 号　日本語教育学会
藤原　安佐（2002）「社会的要因による「聞き手敬語」の使い分け―話し手と聞き手との関係を中心に―」『教育学の研究と実践』第１号　北海道教育学会

＜教科書＞
『伝え合う言葉　中学国語 3』（2006）教育出版

21　藤原（2000）p.62

【問題 3】

○下の会話文では、「です・ます」を使う文と使わない文が混ざっています。
「です・ます」を使った理由と使わなかった理由を考えてみましょう。

（1） … (飲食店で)

店員　：いらっしゃいませ……あれ？
友人　：やぁ。ちゃんと働いてるか見にきたよ。
店員　：わざわざありがとう、来てくれて。
　　①
店長　：(店員を見ながらせきばらい)
店員　：あ、ご注文をおうかがいします。
　　②

①…理由：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

②…理由：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

（2） … (登校中)

アツシ　：よう、ケン。
ケン　：あ、アツシ先輩。おはようございます。
　　③
アツシ　：いや、今は別に部活じゃないんだし、普通に話せよ。
ケン　：えっ、でも・・・
アツシ　：他に誰もいないんだし、いいだろ。
ケン　：うん、わかった。ありがとう、アッちゃん。
　　④

③…理由：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

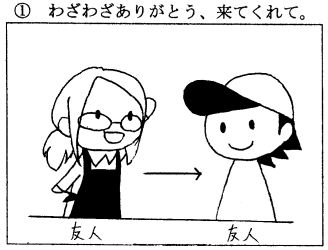
④…理由：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

【解説】

話し相手のことを**どのように判断するか**で、「です・ます」を使い分ける。

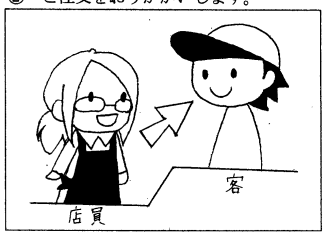
（1）

① わざわざありがとう、来てくれて。



上下関係を意識していない
（仲間意識を優先している）

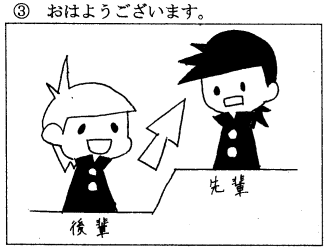
② ご注文をおうかがいします。



上下関係を意識している

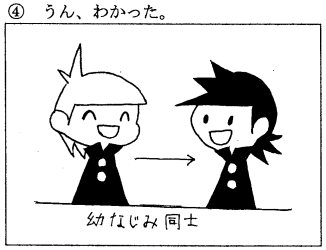
（2）

③ おはようございます。



上下関係を意識している

④ うん、わかった。



上下関係を意識していない
（仲間意識を優先している）

⇨ 「ます」を使う　　→ 「ます」を　使わない

【 演習問題 】

あなたは高校２年生で、陸上部に所属しています。
ある日、あなたは顧問から「今日は大雨が降っているので練習は中止にする」
という連絡を任されました。

○ (1)上級生、(2)同級生、(3)下級生　に対して
あなたはどのように伝え、返答されるでしょうか。
相手との関係を図示してから、最も適したものを選択してみましょう。

ア. あなた：「今日の部活は中止です」
相手　：「わかりました、ありがとうございます」

イ. あなた：「今日の部活は中止です」
相手　：「わかった、ありがとう」

ウ. あなた：「今日の部活は中止だって」
相手　：「わかりました、ありがとうございます」

エ. あなた：「今日の部活は中止だって」
相手　：「わかった、ありがとう」

(1) 上級生

(2) 同級生

(3) 下級生